

## 「天体と生き物の創造」

2020年09月30日

神は言われた。「天の大空に、昼と夜を分ける光るものがあり、季節や日や年のしるしとなれ。天の大空に光るものがある、地上を照らせ。」そのようになった。神は二つの大きな光るものを造られた。(創世記1章14節～16節a)

神はそれらを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地に増えよ。」(創世記1章22節) 神は地の獣をそれぞれの種類に従って、家畜をそれぞれの種類に従って、地を這うあらゆるものをそれぞれの種類に従って造られた。神は見て良しとされた。(創世記1章25節)

第四の日、神は、「天の大空に、昼と夜を分ける光るものがあり、季節や日や年のしるしとなれ。天の大空に光るものがある、地上を照らせ」と言われ、二つの大きな光るものを創造された。昼を治める大きな太陽と、夜を治める小さな月を造られ、昼と夜、光と闇を分けられた。イスラエル人は太陽ではなく、月の動きで季節と年を定めた。満ち欠ける月の方が捉え易かったからではないかと想像する。また、星を造られた。神はアブラハムに「天を見上げて、星を数えることができるなら、数えてみなさい」、「あなたの子孫はこのようになる」と祝福された。星は数えることのできない無数と認識している。太陽、月、星を大空において、日と季節と年のしるしとした。これらの天体が造られる前の第三の日に、草木、種のある草と、実を結ぶ樹木を創造されたとあるが、太陽によって植物は育つという自然科学とは矛盾している。現在の科学では、太陽の誕生は約46億年前で、人類の誕生は約20万年前と言われている。太陽系の向こうに無限に広がる宇宙の生成などは、想像を超える。聖書はもちろん、科学的真理を問うた書物ではなく、神信仰を基盤にして、宇宙と自然と人間、そして、人間が営む歴史についての信仰的な意味を捉え、神による秩序ある創造を賛美、告白したのである。人間にとって、太陽は圧倒的な力と意味を持っているので、太陽を神のように扱った宗教が至る所に存在する。しかし、聖書の民は、太陽を含め、全てのものは神の言葉によって創造されたと告白する。「天は神の栄光を語り／大空は御手の業を告げる。昼は昼に神の言葉を伝え／夜は夜に知識を送る(詩編19:2～3)」と、全ては、神の栄光と業であり、昼も夜も神の言葉と知識に満ちていると歌っている。聖書の告げる神は、自然や自然の延長線にあるものを、まして人間を神とはせず、全てを超越した創造主なる全能の唯一神である。

第五の日、神は「水は群がる生き物で満ち溢れ、鳥は地の上、天の大空を飛べ」と言われた。海の怪獣、水に群がりうごめくあらゆる生き物を種類に従って創造された。また、翼のあるあらゆる鳥を、それぞれの種類に従って創造された。水の中に棲む生き物と空を飛ぶ鳥たちを造られたのである。そして神は、「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地に増えよ」と言われ、水の生き物と空の鳥が繁殖するように、祝福の言葉が告げられた。

神は、第六の日に、「地は生き物をそれぞれの種類に従って、家畜、這うもの、地の獣をそれぞれの種類に従って生み出せ」と、地に、家畜、地を這う生き物、獣を造られた。

神は、第一の日に「光」、第二の日に「大空」、第三の日に「地と海と草木」、第四の日に「時の徴となる太陽と月と星」、第五の日に「水や空の生き物」、第六の日に「地の生き物」を秩序正しく創造された。神ご自身がこれらのものを見て、「良し」と、祝福をもって是認された。天と地の全ての舞台は整った。最後に、神が造ろうとした人間が創造されていく。